ころころ転がっている小石を見ていると心がホッとする。失いかけた感情と共に空を見上げる。

蒼く、透明。崇明であり、いつまでも続く言葉。

空は綺麗だと、誰かが言った言葉を覚えている。

少なくとも私の心に突き刺さったのは嘘ではない。ずっと傍にいてくれた猫と一緒に。

思い出の中にいろんなものを残している。そんな自分がいた。

からからと鳴る下駄が家屋にある。それをどこに仕舞ったのだろうか。

「ねぇ、にゃんこちゃん。一緒に遊ぼ」

猫に思わず笑いかける。猫は鳴き声をあげて応えてくれる。そんな日常の一コマに幸せってあるのではないのか。

そんなことを考えていると、一緒に涙を流してくれた人のことを思い出す。

どうしてだろう、と考えている。

その人はどこにでもいるような人じゃない。普通に凄い人。それは単純に凄いという言葉で一括りできる大したことのない人。

それまで大切だった気持ちをどこに収めればいいのか。今の私にはわからない。でも、それが終わったのなら、これからも旅をしようと思う。

ここは寒い。ここは暖かい。

どこかに転がっている小石は寒気を求めていた。それが本当だった。
小石を追いかける私は自分の夢を見つめていたのだろう。
その小石はもう、どこにでもある凄い人の物だった。
だから、空を見上げたのだ。
今でも見守ってくれていますか、と。

ウソをつくということは何なのだろうと時々考える。

心にあるものは嘘をつくことを見抜いてしまうのだが、それでも一生懸命に頑張ることは嘘を消し去る行為だと誰が言ったのだろう。

いろんな考えがある中、そんなことを思い出すのは決して不思議ではないのだろう。

最も、嘘をつくということは自分に都合のいいことを行いたいと思うからだろう、決して得をする行為ではないのだから。

そんなことを考えても意味がないことぐらいはわかっているが二つとも思えないときはなく、一人で考えることはどこか遠い想いを馳せるかのようにも思えるのが不思議だった。

何もないと言えば早いのだろう。何かがあったら、嘘をつくことになる。結果、人は傷つく。何もしないから人は傷つかず恐れない。だが何かをしない始まらないことを知った人は傷をつくことは必ず必要だと知っているから考えるのだろう。

だから私がこのことを考えることはたいして不思議なことではないのだろう。

きっとそんなことを考えているということが不思議ではなく、私がこれからもこんなことが続くようにと願ってしまうことにも何も嫌な思いはない。

これから私は旅立つ。どこに向かっても意味がないのだからと思いながら、異世界へと行ってくる。

考えることは大切だ。人に向かってそんなことを考えているのだと教えてあげることも大切

なのだ。

だから、私はこれが考えていることだと伝えることが面白いのだ。

ウソをつくということは誰だってできる。そのことを不思議がるだろう。受け取る側は何をすればいいのかがわからないのだから。

だけど、その人もウソをつく。そう、自分に都合のいいように。きっと誰でもそんなことをするのだろう。

だから、考える。だから、教える。だから、ウソをつく。

きっと、私はそれを続けるために。

考え続けるのだろう。

さぁ、異世界に行くということはあなたにとってはどちらになるのだろうと思うと心が躍る。

異世界がウソなのか嘘なのか。でも、確実に言えることは。

あなたは何がウソか気付きましたか？

さて、私は異世界に行ってこようと思います。

これから、どんなウソをついてみようかと思うと、心はドキドキしてしまうことが私にとって、今でも。

ウソをつくことなのです。

心に残ったものは大切にしまっておく。そんなことを考えていた私がいる。
湖の周りに宿る魔力が中央にある泉の噴水に集中して光を集めている。
その光景が心に残ってしまったのだ。
昔、私が子供のときに見た光景と同じだったのだ。
雲に突き刺さる光もその泉を祝福するかのように浴びせかける。光のシャワーとでも言えばいいのだろうか。
美しき世界の中央と、まるで縮図かのようにここにある。
空から雨が降ってきて私の頬に伝うのは涙かそれとも雨か。
今の私にはわからない。
だけど、子供の頃、両親の手を握って飴を舐めて道路を見ていると車が走って来た。
それの速さと同じくらい理解が早かった。
誰かが心にいると。
子供の頃から周りの人たちと同調をすることが苦手だった私はずっと遊ぶことが出来なかった。
でも一人だけいてくれた子がいた。
今でもその子はどこかにいるのだろう。いずれ出会いたいと考えている。
それだけずっといてくれた。心を支えてくれた。今でもその光景を見せることによって私に

見守っているよと教えられたのだ。
ならば今度は私から探しに行かないといけないと考えた。
そんなことを考えている私がいる。そしていつまでも一緒にいられるように。
約束をしよう。
そこはどんなところだったのか。そこはどんな光が見えるのか。
もしかしたら、希望なのかもしれない。泉から水が湧き溢れるかのように希望が現れるのかもしれない。
これから私は家に帰るが、それは果たして綺麗な気持ちになれるのかどうか。
それだけはわからない。だけど、それは希望を作った人のことなのかもしれない。
異世界。そこにその子はいる。いつまでも一緒にいてくれた。
今度は私の番。ずっと遊んでいたことを謝らないといけない。だから。
二人でいつまでも一緒に暮らそうね。
その一言が心の中に響いた、そんな気がした。そして泉に集中する光のように私に光が差し込み始めた。
それはその子がいつまでも見守ってくれているのかもしれない、と思わせるような光量。
光の上を見つめると、その子が。
私に微笑みかけていた。そして差し伸ばしてくれたその手を。

私は握った。もう、離すことはないと。

いつも、私と遊んでくれてありがとう。
だから、私は楽しかった。
いつも、私の手を握ってくれてありがとう。
だから、私は嬉しかった。
いつも、私を見守ってくれてありがとう。
だから、私は幸せです。

これからもそんな日々が続くなんて。
本当に感謝の気持ちでいっぱいです。
幸せだと思う。仕合わせだと信じている。
だから、その手を握り離さないことはずっと続く信頼の証。
ありがとう、ありがとう！
いつまでも。

一緒にいようね！

私はゆっくりとその子と一緒に空へと昇っていった。
その光景を誰も見ていない。
だけど、それでいい。
幸せな人と居られることが一番の大切なことだと知っているから。

行ってきます。

泉の周りに明かりが灯される。間もなく、カーニバルが始まる。
楽しい感謝祭とでも言えばいいのだろうか。そこにはもう。
魔力と光はなかった。
それを知っているものは誰も。
いなかった――。